蜷川幸雄 × 蜷川実花

YUKIO NINAGAWA × MIKA NINAGAWA

〔財〕埼玉県芸術文化振興財団芸術監督・演出家

写真家

公開対談シリーズ 第5回

NINAGAWA 千の目（まなざし）

「NINAGAWA　千の目」の5回目のゲスト、写真家の蜷川実花さんは
初めての女性ゲストであると共に、周知のとおり、蜷川幸雄の長女。
今まで親子対談の企画は数々あったものの、「はずかしくて」（蜷川幸雄）
ほとんど実現せず、公開では本邦初の顔合わせとなった。
初めての長編映画『さくらん』を監督し、来年2月に公開を控える実花さんに対し、『青い炎』や
『噛う伊右衛門』などで映画監督としても一日の長がある蜷川幸雄はどう出るか。
シャイな親子の“緩衝地帯”として、映画や演劇、ダンスのライター、
佐藤友紀さんを進行役に迎え、注目の対談は始まった。

色彩感覚も、カット割りも、映像は俺よりずっといい

佐藤（以下S）「千の目」第5回のゲストはフォトグラファーで、今度は映画監督をなさいます蜷川実花さんです。そして芸術監督の蜷川幸雄さんです。（2人、登場）

実花さんはもともと写真を撮りながら、どこかでは動く映画をいずれかは撮りたかったのですか。

蜷川実花（以下MN）　私は映画を撮りたいというのは全然なかったのです。写真より映画の方がすごいとも思っていないし、写真は表現する事はやればやるほど深くなるのです。ですが、映画会社の方から「何かやりたい原作があったら一緒にやりませんか」と言われていて、1、2年かけて、これだったら私の力を出せる所があるかも知れないと思ったのが、今回の『さくらん』です。普段だったら、いろいろな撮影とか取材を受けたり、家に帰って話したり、スタッフとかに話したりする時に、いろいろな蜷川実花を使っているつもりですが、全部の蜷川実花が全員集合して、しかも120パーセントの全力投球でやってもやっても足らないかもというぐらい監督って大変なんだという事がすごく面白かったです。

S　では、記者会見の様子と、これも本邦初公開の撮影風景を収めたビデオを、特別に見せて頂くことにいたしましょう。

（ビデオ上映）

蜷川幸雄（以下N）　おお、俺よりいいなあ。

MN　まだ出せるのはこれだけなんですよ。（拍手）

S　実花さんの映像は、写真でも本当に蜷川実花しか出せないピンクの色とか、先ほどの映画の色も吉原の雰囲気が、綺麗というか、華麗な色に集約されそうで楽しみなのです。

N　そうですよね。インターネットでやった映像の作品を見ても色彩感覚が違います。僕よりもはるかにポップで、カット割りも細かいし、「ええ、ここへ飛ぶのか」と、僕の世代と明らかに違う。それはわりと客観的だと思います。映像は僕より確かにいいです。編集もカット割りのタイミングも早いし、俺の方がちょっと遅いかな。

S　ジム・ジャームッシュ監督なんかはオレンジ色が大嫌いだそうですが、嫌いな色ってありますか。

N　僕はオレンジはやだなあ。僕の舞台にオレンジが出てきたことはほとんどないと思う。

MN　私は茶色が嫌いで、時代劇は一般的には生地色の家具がいっぱいあるので、それは絶対にイヤだといって全部黒にしたので、『さくらん』には生地色、いわゆる茶のタンスとか、柱とかは一本も出てこないのです。わりと浮世絵をベースに主に春画から、すごくハデなタイプの春画から引っ張ってきたのです。『さくらん』の舞台の江戸時代に誰も生きていたわけでないので、浮世絵だったりとかの文献を見て誰かがイメージし、それをまた見て、というその間が一切いらないと思い、浮世絵と私のフィルターを通して、アウトプットできたらそれでいいというルールにしました。

S　ところで、蜷川家で育つということについて、何万回質問されたと思いますが、「うちのお父ちゃん、何かスペシャルな事をしているみたい」と感じたのはいつ頃でしたか。

MN　本当に小さい頃から四谷シモンさんの人形が（家に）あったりとかで、「この人形はなんでパンツを履いていないのかな」と思ったり、でもこれも可愛いし、ロボコンも、リカちゃんも好きだし、横尾忠則のおじさんの絵も好きだし、このぬりえも好きというような、すごくフラットでした。それが特別な事というのではなくて、ごっちゃになっていたけど、それはすごく良かったのだと思います。特別な人なんだと思った記憶はないですが、ただドラマを見ても私は未だにテレビとか、映画とか、ドラマを一視聴者として見られないのは、父と母のせいだと思っています。見ていると「何だよ、カメラ寄りすぎだよ」とか「顔だけで芝居しやがって」とか、「本当に下手ねえ」とか、小さい時からそういう家庭に育っていました。「食べ物を食べている口元を写すな」とかはすごく言っていました。

左から蜷川幸雄、進行役の佐藤友紀さん、蜷川実花さん。

S　「食べ物を食べている口を写すな」で思い出しましたが、北野武監督が食べるシーンを自分で撮るのはとても苦手だそうですが、映画監督のお二人はそういうのはありますか。セックスを撮るよりも食べるシーンを撮る方が難しいとか。

N　僕の『青の炎』で鈴木杏さんが二宮（和也）くんの妹の役でしたが、そういう兄弟が二人でいる部屋は撮れないですね。僕はホームドラマみたいなのはダメなんです。そういうシーンを撮るのがはずかしいのだと思います。ホームドラマみたいにご飯を食べている所とかは撮りたくないのですね。「イヤだなあ」と思いながら撮っているのでカット割りもよくないし、そういう所も下手です。

MN　私が監督した作品の中で、吉原から足抜けをするシーンがあって、ある意味では映画で重要な所でもあるので一応撮りましたが全部カットしました。説明的な事とかはすごく飛ばしたくなるのです。

得意だったのは、ラブシーンが得意でした。すごくしつこいのですよ。（笑い）　特に男の人に対してうるさくて、「もっとこうして欲しい」とか、「女だったらこうして欲しい」とかをすごくこだわっていたみたいで、椎名桔平さんにまで、「手はこうして下さい。こうでなくて、こうです」とか。

photo:幸田 森　構成：鴨澤章子